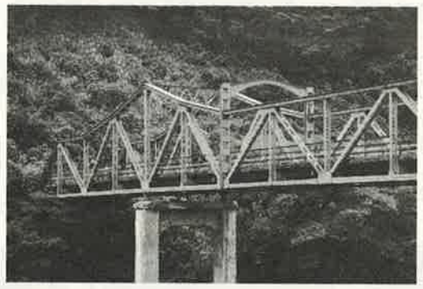
シリーズ隠れた建築紹介　～山麓のランドマーク“橋～

富山県福野町は東京中央郵便局を設計した吉田哲郎が生まれた町である。そして福野町には彼が設計した郵便局、図書館、山田邸そして墓碑などがある。私も幸い福野町に生まれ育ったがその業績には全く無知だった。こういう私が隠れた建築を紹介するのはとんでもないことと思うが…。その周辺を徘徊し少し特異な景観を体験している。代表する散居村景観をはじめ川沿いや山麓・山間景観がある。今では交通基盤や防災河岸整備によってその景観は一変してしまったが、河から谷筋に入るとかっての景観を探すこともできる。その景観の中で上平村から白川村へ行く道中にある変わった橋(新馬狩橋)がある。黄色くペンキを塗られ、リベットで構築された橋がある。通り過ぎれば何の変哲もないような橋である。しかし風変わりのような橋である。見方を変えれば異様な橋にもおもえる。よく見ると建築への情熱が萌芽した分離派の様相を彷彿として読み取れる橋である。私はこの橋が昭和10年頃の築造であること。川田工業によって施工されたということしか知らない。誰が設計されたか知らない。しかしこんな山奥にも物を創ることを考えさせられる人工物があることに、大袈裟にいえば日本のかっての方々の歴史を感じるのである。かっての山間道路は山筋にぴったりとそうようにあるが、それができなくやむなく渡らなければならないところで橋がある。この橋もそうである。やむなくその労力に匹敵する高価な橋が慎重に架けられた。この橋はこのことを反映して充分に美しい橋に見える。近年、山間道路は山筋から離れ、直線的でトンネルと高架橋によって結ばれ、山間を遊ぶ程の余裕もなく通り過ぎる路線である。皮肉にもこのことによって、この橋は渡る橋から観て想い渡る橋になりました。谷間を望む風景で人工物の味付けをするささやかなランドマークとなっています。

㈱ＧＡ開発研究所所長・柴田裕弘



北陸支部インフォメーション

■福井支所講演会報告

福井支所主催の講演会が、98年１月30日に福井大学において藤川原設計・山下 博氏（福井大学1973年卒業）により、『愛知県児童総合センターの設計をとおして』の演題で行われました。この総合センターは、山下氏が実質的な担当者としてたずさわった設計であり、1997年度日本建築学会賞受賞作品でもあります。講演会には、学生も含めて300名ほどの参加者があり、山下氏の設計コンセプト、スライドによる作品紹介を皆さん熱心に聞き入っていました。講演会終了後、福井大学大学会館で懇親会を催し、山下氏を囲んでいろいろな話題でなごやかなひとときの懇親の場をもつことができました。（石川浩一郎）

■ 97年度北陸建築文化賞決まる

３月末の支部役員会において、下記の作品に対して97年度北陸建築文化賞を授与することが決定されました。

○燕喜館（旧斎藤邸再建築工事）／ 新潟市長・長谷川義明
○金沢市などの都市景観を描いた長年にわたるスケッチ収録／櫛田清
○新日本海フェリー敦賀ターミナル／(株) 竹中工務店
○善光寺門前大門町上地区のまちづくり／ 長野県長野建設事務所、大門町上商店街協同組合他

■ 98年度北陸支部総会

日時：98年５月22日（金）
13：30～14：30　通常総会
14：40～16：20　鼎談「住まいがかわる（日本の住まい・北陸の住まい）」日本建築学会・尾島俊雄会長＋広瀬誠氏・浅生幸子氏
13：00～16：30　97年度支部共通事業設計競技入選作品展
16：30～18：00　懇親会
会場：高志会館（富山市千歳町１－３－１）

■ 北陸支部50周年記念式典

日時：98年７月31日（金）
記念講演会　(15:00～17:00)／赤瀬川原平氏
記念式典　(17:00～18:00)、祝賀会（18:00～）
会場：メルパルク金沢

■ 98年北陸支部大会

日時：98年８月１日（土）
開会式（8：45～9：00）、研究発表会（9：00～13：30）
作品展示（8：45～13：30）
会場：金沢工業高等専門学校

■ 富山支所行事

建築探訪「縄文建築を探る － 桜町遺跡の見学及び座談会 －」
日時：98年６月27日（土）8：30 ～ 16：00
定員：40名（申し込み先着順）　参加費：2000円
申し込み方法：往復はがきに氏名・住所・電話番号・勤務先・所属・同住所・同電話番号を明記して富山支所（〒939 － 8084 富山市西中野町1－7－27 タカノビル４Ｆ富山県建築士会 TEL 0764－95－7466　FAX 0764－95－7448）に申し込む。

■ 新潟支所行事「親と子の建築講座」

９月26日（土）、10月24日（土）、11月14日（土）に予定

日本建築学会北陸支部ニュース「ＡＨ！」第13号
発行日　1998年５月10日発行
発　行　日本建築学会北陸支部広報部会
相田　幸一（新潟）　加藤　則子（富山）
長谷川兼一（長野）　後藤　正美（石川）
桜井　康宏（福井）　石川浩一郎（福井）
事務局　室田　文男・瀬口さゆり
〒920 金沢市玉川町15－1、パークサイドビル３Ｆ
TEL&FAX 076-220-5566

AH! HOKURIKU
第13号

特集
産・学・官の共生

支部ニュース「AH!」の第13号をお届けいたします。前号は新広報部会員の皆さんのご尽力で予定を上回る早さで発行することができましたが、今回は部会長の怠慢で発行が遅れてしまいました。お許しください。

さて、シリーズ「共生」の第３段として今回は、われわれ北陸支部の支部設立50周年を機に学会や大学の役割を改めて考えてみたい…という趣旨で、福井で活躍されている産・学・官の代表者４名にお集まりいただき、お酒を酌み交わしながら忌憚のない話し合いをしていただきました。大学人には頭の痛いご指摘もいくつかみられますが、今後の具体的な提案もいただいて展望が開けてきたように思います。

なお、末尾の「支部インフォメーション」でご紹介しますように、今年の支部大会前日の７月31日（金）に金沢市のメルパルク金沢にて50周年記念式典が開催されます。作家・赤瀬川原平氏のユニークな講演会も予定されていますので、大会と合わせてこぞってご参加下さるようお願い申し上げます。

産・学・官の共生

「産・学・官の共生」ということは随分以前から言われていますが、お互いに相手の顔がよく見えないため、どうアプローチすればよいのかが分からないというのが実状ではないでしょうか。

今回は、大学と地域の建築界との共生の方向を探るため、大学側からは福井大学工学部長の玉置伸悟氏、自治体からは福井県土木部技監の高木靖夫氏、設計事務所代表として日本建築家協会東海北陸支部長の吉田繁治氏、地元の建築業界の代表として(社)福井県建築工業会会長の加畑弘志氏の４名の方をお招きし、地域の建築業界や自治体からは日頃、大学がどのように見えているのかを、大学への要望も交えながら自由に語っていただきました(広報部会)。

大学は敷居が高い！

高木：福井県の建築界は、すばらしい環境に恵まれていると思います。なぜならば、建築系学科のある大学が地元にあるということです。ただ、大学は何と言っても、我々からみると敷居が高いです。もう少し、雲の上からずっと下りてきてもらわないと。

加畑、吉田：そうです。そうです。

玉置：そんなに敷居が高いですか。我々は大学の中にいるからわからないのですが、たとえばどんなことを敷居が高いと感じられますか。

吉田：まず、大学は行きづらいですね。廊下は暗いし、先生方の部屋のドアを叩くのは相当勇気がいります。それに、どこに言いに行けばよいかがわかりませんし。

加畑：こういうことが大学で出来るのだという情報がない。広報誌などで知らせてほしいです。だいたい大学は、市民に接近していないですね。私などは、実際に実験してみるような「臨床建築学」を大学でやってほしいと思っています。

玉置：大学の方は、市民に接近したがっているんですがね。福井大学では地域共同センターが公式の窓口になっています。我々と民間の方との間には誤解があるようですね。相談に来て下されば、我々の方は誰でも気軽に応じると思いますよ。実際、環境設計の中でも土木系の教室は、繊維を使った保湿マットの開発などで、繊維業界と共同研究をしています。

福井大学キャンパスから市街をみる

玉置　伸悟さん

高木　靖夫さん

吉田　繁治さん

加畑　弘志さん

高木：それでしたら、行政側としては、たとえば、防災・工法・構法など建築基準法38条に関わる認定を地域の大学でやってもらえないかと思います。現在は東京の建築センターで認定をもらう仕組みになっているのですが、地域の建築条件や実状はその地域でないとわかりません。実務面からみたらこれはおかしいことで、陳情といった方がよいかもしれませんが、福井大学で認定を出してもらえば、時間も費用もずっとかからないわけです。こういう点でも、開かれた大学となるのではないでしょうか。

加畑：何でも中央というのではなく、地元でやれるようなシステムができると、よい人材も県外に出ずに残ると思いますよ。

吉田：図書館なども市民に開放してほしいですね。閲覧だけでもできればいいです。専門書は何といっても大学ですから。

建築分野での産・学・官共生の可能性

高木：私は、産・学・官は三位一体だと思いますよ。お互い、より緊密な連携を図りながら情報交換を行うことが重要であり、その中で『学』が中核となって、技術開発や技術協力に向けたシステムづくりができると良いと思いますが。

玉置：ここまでの話を聞いて思ったのですが、福井大学の工学部の中では、電子や情報、機械、化学などは民間との共同研究を相当やっているのですが、建築だけは殆ど何もやっていない。これは何故ですかね。建築では、産と学がどうも結びつかない。他の分野でやっているのに、建築だけ敷居が高いというのもおかしいですね。

吉田：そうですね。建築は一番、住民の生活に直結しているはずなのに。

加畑：私は教育学部の先生に別の分野の事業の関係で研究をお願いし、共同研究の申し込みをしたことがあります。特許を取るなどで、大学と共同研究が出来ればよいと思います。でも、こちらがお金を出しながら、大学の方は簡単には金を受け取れないといった感じですね。寄付の申請書が、企業側から「寄付をさせていただきます」という書き方なんです。

玉置：それは本当におかしいですね。しかし、大学に来ていただいて我々に直接会っていただくと、そんな権威的なことは全然ないのですよ。今の時代は大学の研究施設が民間よりも充実しているということもないし、あるとしたら人材だけなんです。

高木：我々にとっては、その人材があるという点が魅力なのです。我々がもっと大学をうまく利用しないとい

福井大学地域共同センター

碓田　智子さん

けませんね。

吉田：金沢工大では民間の方に下りてきて研究されている先生方もおられるようです。しかし、あれは私学だからできて、国立は制度的にちょっと難しい面があるのかもしれませんね。

産・学・官共同の建築サロンの創設を！

加畑：今日のように産・学・官の三者が顔を会わせる機会が殆どないというのが、どうもいけないようですね。毎年１月４日に県内の建築関係業者が顔を会わせる建築年賀会が行われていて、それには約800名が参加しています。知事も出席するんですよ。ところが、大学関係者はまったく出席がないんです。まず、手始めに、大学の方も建築年賀会に出席してもらい、お互い顔を知り合うことから始めたらどうでしょうか。

玉置：ほう、そんな年賀会があったのですか。長らく福井にいますが、全然知りませんでした。

吉田：今日の会のように、産・学・官の三者が、お互いにざっくばらんに話せるサロンのような場があればいいですね。

高木：そうです。会費は持ち寄りで、気楽に話せる場をぜひつくりましょうよ。

大学教育における共生

玉置：教育の中にも、民間の方が入ってきていただければと思います。学生は実社会のことが何もわかっていません。就職しようとしても、何をしたらよいかがわからない学生が多いのです。

吉田：インターンシップ制などを取り入れて、大学はどんどん民間を活用してくれたらよいと思いますよ。建築協会とか設計事務所とか、どんどん活用して下さい。

玉置：大学でも、設計教育の場に民間の設計事務所の方に来ていただく試みをはじめています。これをもっと発展させていきたいと思っています。

高木：県庁にも学生が来てくれたら、行政の職場にいる建築職の仕事を洗いざらい見てもらって、行政の現場の現実の姿を学生に理解してほしいですね。施工者の立場、設計事務所の立場、行政の立場を、学生に見せる場がほしいです。学生が40人、80人と、どっと来てくれても受け止めますよ。我々の方の任務は、学生さんに徹底して、官・民のありのままの姿を見栄を張らずに見せることだと思います。とにかく、現場を知ってもらうことだと思います。

加畑：大学には、学生に卒業してからの心構えを教えてほしいですね。私どもは、専門の知識の方はそう期待していません。ただ、基本的な人間形成、つまり本を読もうとする力、何故かと疑問を持つ力、それから技術を盗もうとする姿勢、それだけでいいんです。それさえあれば、大卒で３年かければ私どもの方で、通常の仕事であれば、一人前にすることができます。

吉田：私も本当にそう思いますよ。

玉置：我々もそれは充分にわかっています。しかし、本を読む力、疑問を持つ力と簡単におっしゃいますが、それが今の学生には大問題なんです。４年生の卒論のゼミでは、そういった力を身につけるように努力はしていますが、できているとは言い難いです。ただ、今日のお話ではっきりしたことは、とにかく、まずは３人の方々に福井大学へ講師で来ていただくことですね。

－1998年２月13日　福井市内で収録－

（聞き手・編集:福井大学教育学部　碓田智子）

心のバリアフリーを

近年、バリアフリーという言葉をよく耳にするようになりました。石川県でもバリアフリーと名の付く事業が盛んなようです。昨年、私も県営住宅のバリアフリー化による住戸改善工事に携わる機会がありました。住宅の内部に手摺りを付けたり、床の段差を無くしたり、キッチンを車椅子用のタイプに変えたり、また各部屋に非常用ブザーを付けたりと、身体にハンデイキャップを持つ人にとって、内部を住みやすくするものでした。しかし、その時思ったことなのですが、①住宅の内部は改善されても一歩外に出ると階段があり、どうしても介助が必要。②玄関外に非常ブザー警報装置が設置されていますが、緊急の場合果たしてどの程度人が助けに来てくれるのか…など色々な疑問が残りました。ということは、いくら物理的にバリアフリー化をしても周りの健常な人たちの心のバリアフリーをしないことには意味がないのではないでしょうか。スロープを付けることは結構なのですが、階段であっても障害を持つ人に対して周囲の人が気軽に手助けする気持ちを持ちたいものです。

私事ですが、次男は身体に障害を持っています。現在は経管栄養のチューブを付け寝たきりの状態で全面介助が必要です。にもかかわらず障害児教室ではありますが、長男と同じ地域の小学校に毎日通っているのです。一昔前までは考えられないことでしょう。次男は周りの児童や先生たちに支えられて元気に過ごしていますし、私たち家族も周囲の人々に助けられて、楽しく過ごしています。当然、周囲の人たちの理解と協力があるからこそだと感謝しています。

今の社会も、いろんな障害を持つ人たちへの思いやりを持つことの方が、どんな物理的な設備を造ることにより勝るのではないでしょうか。心のバリアフリーによる、共存できる社会への実現を願っています。

―㈱清水建築・今井 琢磨

関係者たちの情熱が咲かせた花

満開に咲き誇る桜の名所「金ヶ崎」の花見の席で「あれは間違いなくお前の転換点になる。」といつも辛口の割烹の若主人から珍しい激励を受けた。商店街の理事長からも「今後は設計監理報酬の考え方を改めたい。仕事に向かうエネルギーに感服する。」とのお言葉を頂戴したが、設計や監理に対するスタンスを特に変えたつもりはない。強いて言えば、建築ONLY の呪縛から離れて生まれた「夢＝建築に対する新たな欲求不満の蓄積」が、多彩な顔ぶれに刺激され、時期を間違えて咲き始めた。ならば散るまい、と思う今日この頃。

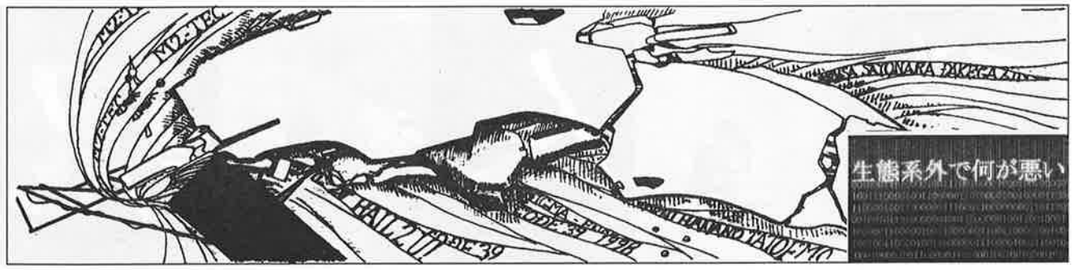
「前例が無いから、とにかくやってみよう！」を掛け声に力を合わせた『敦賀駅前商店街アーケード改築』も１期工事を終え、関係者の名前を指折り数えるとまるで映画のラストに流れる出演者たちの字幕のようで感慨深い。

96年11月、指名８社による設計コンペの現説でやる気を煽られ、翌１月、２日間に渡り候補4社によるプレゼンテーション＋ヒアリングにて、常識を外した当社の提案が選ばれた。開港100周年へと市が推進するシンボルロード化、電線共同溝事業の官庁、企業や関係法令との交渉や格闘に多くの調整や検討を要した。関係者は「商店街／施設高度化助成／商業診断／見積参加18社／元請け／協力業者／メーカー／検査機関」と主な打合せ者で、なんと150名を超える。「埋設管移設／道路工事／リース会社／問屋／運搬／産業廃棄処理／宿泊／飲食 etc」各工事の職方を含め、さらに約200～250名の「顔」との出会い。もちろん笑いあり、ドラマあり。そして道行くエキストラたち。

設計コンペの指名～安全祈願祭を経て約17ヶ月。我々がこの仕事で捉えた写真は既に650枚。１枚１枚が設計監理の結晶。また施工サイドの工程写真と併せ、２期竣工時の電柱の抜柱と開港100周年記念イベントを目指す。ここで築いた人的および手法的財産は、今後のデザイン活力の源泉として生かさなければ。昨秋来敦したＩＤの喜多俊之氏は「デザインの役割は、生活が楽しく整えられるための火種である。」と明言した。その火種を熾し、絶やさぬ努力を続ける使命に日々感謝して、厳しい建築環境を乗り切りたい。

―有限会社山内建築事務所　with SPACE VISION・山内正樹

敦賀駅前商店街アーケード改築



（福井大学大学院１年 ・ 村瀬正彦）

小諸のまちづくり

最近、町おこしや村おこし、市街地活性化の事業が全国各地で盛んに行われているが、地方都市では、まちづくりの考え方や歴史的価値観の変革等によって、近代的都市づくりから、歴史・文化遺産を活かしたまちづくりへと、変化してきている様である。

小諸市でも何年か前から、大型店の郊外出店につれ、商業圏が郊外に拡大してきている。また、その一方で中心市街地の商店街に、空店舗も目立ちはじめている。

この様な状況の中、進展する高速交通網時代、とりわけ新幹線開通に伴う交通体系の変動により、商店街の中で危機感も生まれ、若い人達を中心に町おこしグループが幾つか誕生し、商店街もまた、自ら計画案を策定するなど、活性化に向けた動きが活発化している。

幸い小諸市は、懐古園で知られる小諸城の城下町、また北国街道ぞいに発展した宿場町でもあり、歴史的に貴重な建造物が多く残されている。また、文豪島崎藤村ゆかりの遺跡・文献なども残されており、訪れる人も年間で110万人を数えている。

市では、数多く残る歴史的・文化的遺産を活用したまちづくりを目ざし、建設省の身近なまちづくり支援街路事業に取り組み、平成９年度から調査事業を行っている。

この計画では、地域住民の意見を反映させ、まちづくりに参画できる市民会議「歴みち事業調査懇談会」を設置し、計画策定に向けた議論を展開しているところである。

小諸市の将来都市像を「高原に育む活力ある詩情公園都市小諸」として、今、官民一体でその実現に向け、行動を起こしているところである。

—小諸市役所・皆瀬 叔洪

心の安らぎ

夏が過ぎ、気温も水温も落ち着いてくると、私の待ちに待ったシーズンの到来である。冬はまだまだ遠いとはいっても、AM3:00は肌寒く、眠い目をこすり、老体にむち打ちながら準備にかかる。１週間も前から考えた仕掛けは万全ではあるが、敵の護衛が自然とあってはいかなる準備も過ぎることはない。

私の住む新潟県は「雪」と「コシヒカリ」が代名詞のように語られがちだが、『美しい海と長い海岸線』はとても魅力的で釣りバカの私には随分と恵まれた環境の中に暮らしていることとなる。

さて、話はもどり悪友の短いクラクションが聞こえ、彼も私と同様、釣りバカにふさわしい笑みをたたえ、決戦前の余韻にひたっているようである。

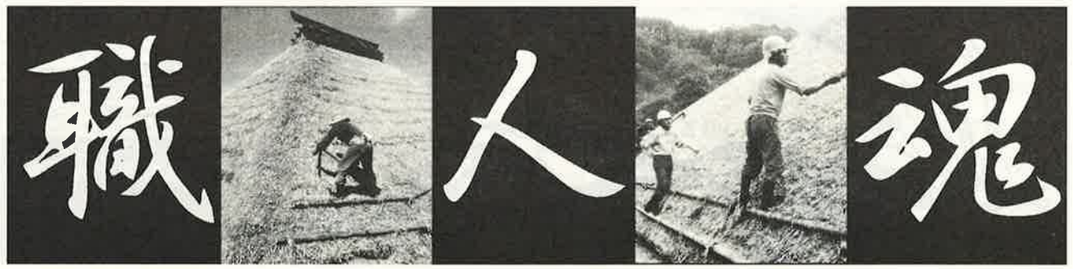
釣船に乗り込み、15分程でいつもの突堤に着く。常連と挨拶を交わしながら自慢の竿をたらすと、何度目かで小気味よい感触が手に伝わってくる。ちょっとしたやりとりの後、姿を見せたのは手の平ぐらいの「ちぬ」(黒鯛)。狙い通りとはいえ、リリースサイズだ。その銀色の体が水中深く見えなくなるまで見送り、次の糸をたらす。

釣好きの人は多くいると思うが、私の場合糸をたらし日頃の生活をいっさい忘れ、当たりの瞬間を待ちわびてる時間がなんとも好きなのである。

現実逃避と言う理由ではないが、それに似たものかもしれない。雑念を払い、無心で何か打ち込むことはストレス解消につながるものと考えられている。ただし、釣の場合、《ボウズ》(釣れない)ということもあり、心の安らぎどころかストレスが倍になることもある。(笑)

先に申し上げた様に、雪国新潟には真鯛や黒鯛等の魚影の濃い釣場が数多く「コシヒカリ」と「美しい海と長い海岸線」そして【心の安らぎ】を求めて一度釣をなされてはいかがでしょうか。

—北日本コピー有限会社・高橋 康博



(信州大学工学部社会開発工学科４年・遠藤由樹)

リフォームと１％ for ART

部屋の壁面に鏡を設置すると、その空間が鏡に反射し、部屋全体が広くなったように錯覚する。インテリアを変えてみたいと考えたとき、一枚の鏡を壁面に設置すると、それだけで空間の雰囲気が変化し、気分を一新させてくれる。誰にでも出来てとても簡単に取りいれられる。このことを考えるならまさにリフォームの第一歩とも言えるのではないか。鏡の空間への効果。この応用編が実はアートに通じるものがある。

平面作品を壁面に設置すると、壁面に奥行きや広がりを感じさせてくれ、また、彫刻など立体作品はその空間の大きさや形がどのようになっているかを写し出してくれる。空間にあわせて様々の作品がうまく調和すればそこに特徴ある雰囲気が作り出される。アートは空間のリフォームに役立つのである。このようにアートと建築物には大変深い関りがあり、お互いを際立たせるインタラクテイブ(相互作用)なものを持ち合せている。アメリカの公的建物は建築物の総額の１％相当のアートを備えることが方針として義務づけられているが今、日本においても１％相当のアートを考慮することが建築関係者に理解が深まりつつあるとされている。

この１％のアートとは今後の建築物と環境を総合的に考える点で大変大きな役割がある。

いわば、都市づくりに公園、グリーンベルトが必要なものであり、だからこそ一定の構成比があるのと同じように、建築物にも環境のバランスを考える上で公園の役割をアートに求められるのは決して不自然なことではない。仮に建築空間にアートが十分に設置されていなければ、その空間は人に例えるなら服を着こなせずにいるのと似たようなところがある。建築物のもつ心地よい空間を引き出すには調和がとれていて、程よい価値あるアートの役割も大きい。

アートは自然を投影してくれるもの。そして特徴ある環境の中で自然に育つものなのだ。草は１シーズンで成長し、樹木は20年もあれば、成長する。１％のアート。これは苗床のようなものだ。樹木のように環境の中にあってアートそのものを理解することでアートは育っていくのである。

—MAU FINE ART (アートギャラリー)・宇尾繁樹/John Mills

"私の家には
この鏡がいいわけ？"

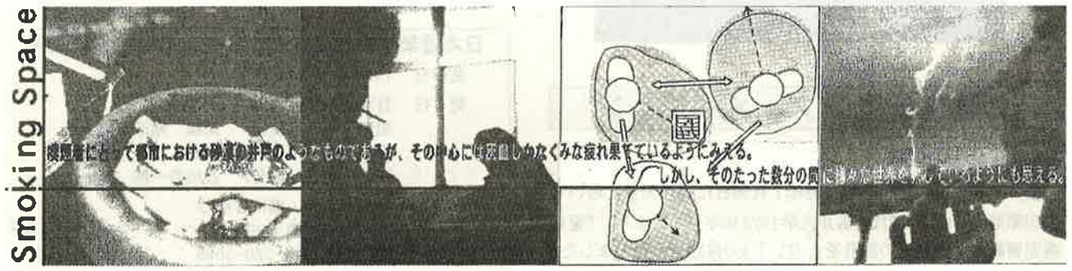
シリーズ北陸の酒 ～酒について思うこと～

うまい日本酒を造る必要条件は、水と米といわれているが、これらはいずれもその土地の気候風土に根ざした要素である。建築も同じ面をもっており、古来の民家などには地域の環境に対応するための工夫が見られ、結果的にその地域独特の形態や機能を生み出すことになっている。ここ北陸も豊富な名水とうまい米の産地ということで、うまい日本酒に巡り合えることを期待している。私はここに来てまだ間もないので、うまい酒を味わうチャンスが少ないのが残念だ。

日本の土蔵は伝統的に厚い土壁で造られてきたが、土壁自体が温度変動を安定させる効果と調湿作用を備えているといわれている。これは、建材のもつ熱容量や湿気容量が大きいために、空間内の温度の変化や湿度の変化を緩和させることが可能であることに起因している。例えば、ＲＣ造の建物に入ると、空調されていなくても、夏にはひんやりと、冬には暖かく感じることを経験することがある。調湿作用は、土壁自体が多孔質であることによりもたらされている。空間内の空気に含まれている湿気を空隙内に蓄えることが可能であるため、高温多湿の空気が土壁表面にふれると、湿気は内部の空隙に浸透していく。また、少しでも湿度の低い空気が表面にふれると内部の湿気が放出し、同時に蒸発潜熱を奪われることにより表面の湿度が低下する。このように、空間内の湿度は一定に保たれると同時に、夏のひんやり感にも寄与している。

酒造りにおいて仕込みの段階には、特に温湿度管理が重要となり、空調設備を投入している蔵元もあるようである。実際に調湿用建材を使用して温湿度管理をしている酒蔵を知っている。残念ながら、ここ北陸ではないのだが、このような発想には非常に魅力を感じる。恐らく、あちこち探し回れば見つかると思う。日本の建築が兼ね備えてきた伝統的な室内環境調節機能を、現代の建築空間に生かすことにより、どの程度酒のうまみがましているかは定かではないが、イメージは決して悪くはない。日本酒が大好きな私としては、とにかくうまい酒に巡りあえれば幸せになれる。

—広報部会・長谷川兼一



(新潟大学工学部建設学科建築学コース３年・青木一美)